

海鳥、環境そして人間

— 海鳥からみる地球環境の将来 —

平成13年度 山階芳麿賞授賞式と受賞記念講演会

平成13年6月1日（金）午後2時～午後5時



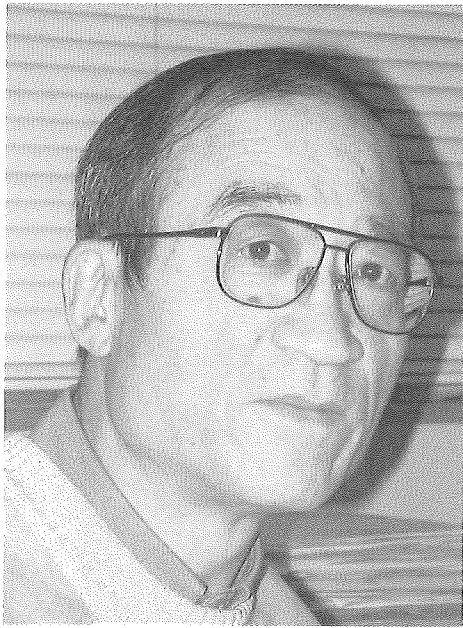
主催
財団法人 山階鳥類研究所

共催
朝日新聞社

後援
我孫子市

プログラム

- 14:00 ~ 14:05 開会の挨拶 山階鳥類研究所 副所長 山岸 哲
- 14:05 ~ 14:26 第10回山階芳麿賞授賞式
山階鳥類研究所総裁お言葉
山階鳥類研究所 総 裁 秋篠宮殿下
山階芳麿賞の紹介 広報室長 杉森 文夫
本年度受賞者の紹介と選考経過 所 長 黒田 長久
表彰状とメダルの贈呈 理 事 長 浅野 長愛
- 14:26 ~ 15:45 受賞記念講演
「海鳥、環境そして人間 — 海鳥からみる地球環境の将来 —」
第10回山階芳麿賞受賞者
北海道大学大学院水産科学研究科 教授 小城春雄博士
- 15:45 ~ 16:05 休 憩 (20分間)
- 16:05 ~ 16:35 ビデオ上映
サイエンスアイ (NHK制作 1996年7月6日放送)
「日本の海をプラスチックゴミがおそう」
- 16:35 ~ 16:50 ビデオの解説と質疑応答 小城春雄博士
- 16:50 ~ 16:55 閉会の挨拶 朝日新聞社文化企画局 局長 高木敏行



第10回山階芳麿賞受賞者
小城春雄 博士
(北海道大学大学院水産科学研究科教授)



1979年 エインリー博士とベーリング海の船上で



1977年 ベーリング海でロシアの漁業監督官等と. 右端の人は日本の宝塚の大ファンでした

このページの写真は6～9ページの「海鳥研究の自分史」を参照してください。



利尻ウミネコグループ、マイ・スチューデント達



2000年 利尻島でのウミネコ研究チーム、茶髪人、大酒飲人、おしゃべり人等

このページの写真は6～9ページの「海鳥研究の自分史」を参照してください。

海鳥、環境そして人間

— 海鳥からみる地球環境の将来 —

平成 13 年度 山階芳麿賞授賞式と受賞記念講演会

日時：平成 13 年 6 月 1 日（金）午後 2 時～午後 5 時

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター 417 号室

（センター棟セミナーホール）

〒 151-0052 渋谷区代々木神園町 3-1 TEL.03-3467-7201（代）

<http://www.nyc.go.jp>

会場までの交通：

小田急参宮橋駅下車 徒歩 5 分

地下鉄千代田線代々木公園駅下車 徒歩 11 分

京王帝都バス新宿西口 16 番乗り場・渋谷駅南口 14 番乗り場から「代々木 5 丁目」下車

主催

財団法人 山階鳥類研究所

共催

朝日新聞社

後援

我孫子市

目 次

口 絵

第10回 <small>やましなよしまろ</small> 山階芳麿賞受賞理由	3
<small>おぎはるお</small> 小城春雄博士のプロフィール	4
海鳥研究の自分史	6
第10回山階芳麿賞受賞者 北海道大学大学院水産科学研究科 教授 小城春雄博士	
山階芳麿賞とは	10
山階芳麿博士の業績	11
山階鳥類研究所の概要	12
賛助会員のご案内	14
賛助員申込書	15

やましなよしまろ
第10回 山階芳麿賞受賞理由

山階芳麿賞選考委員会委員長 黒田長久

北海道大学大学院水産科学研究科教授、小城春雄博士は、アラスカのベニザケ研究から故あって海鳥に転向され、20年間毎年、長期洋上調査でベーリング海、北太平洋、オホーツク海にまで航し、未踏の海洋鳥学にエネルギーに貢献され、多くの後継者が育ちつつある。その業績は、ミズナギドリ、ウミガラスなどの食性、漁業や海洋プラスチック汚染との関係、さらに、ウミネコ、アホウドリなど海鳥の離島繁

殖の調査、指導に及び、学術的、応用的に貴重である。

今や、国際的に著名な博士の、このようなパイロット研究、調査の業績は、研究者の少ない日本の海鳥鳥学の発展に志す人々を奮起させるに十分である。

博士は北方四島海域の原自然にも親しく接してこられた。博士の今後のリーダーシップへの期待が大きい。

【賞状の文面】

山階芳麿賞

小城 春雄 様

あなたは北太平洋における海鳥の生態解明とその研究成果を基にした海鳥の保護を推進する礎を築かれ後進の指導にも尽力されましたこれらの業績を讃え山階芳麿賞を贈呈いたします

平成十三年六月一日

財団法人 山階鳥類研究所

理事長 浅野長愛

おぎはるお 小城春雄博士のプロフィール

略歴

1940年2月5日東京生まれ。北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了、学位取得(1975)。北海道大学水産学部助手(1977)、同大学水産学部講師(1980)、同大学助教授(1984)、同大学教授(1995)、同大学大学院水産科学研究科教授(2000)。

専門は海洋生態学。

主な役職は環境庁野生生物保護対策検討会検討員、北海道ウミネコ等被害対策検討委員会委員、北海道大学自然環境保全審議会委員など多数。

学位論文

ブリストル湾におけるベニザケ(*Oncorhynchus nerka*)幼魚の生態学的研究(修士論文 北海道大学 1971)

Ecology of the seabirds in the Subarctic Pacific Regions: Food and feeding habits of the Common Murre(*Uria aalge inornata* Salomonsen) and Thick-billed Murre(*Uria lomvia*(Pallas)) in the Okhotsk Sea, Northern North Pacific Ocean and Bering Sea. (博士論文 北海道大学 1977)

主な著書

オーシャンバード:海鳥の世界(原著:ラース・レーフグレン、日本語監修:黒田長久)、翻訳分担 第2章 海鳥の特性、pp.21-52、旺文社、240pp.(1985)

プラスチック粒子を取り込む海鳥たち、pp.22-35、佐尾和子・丹後玲子・根本稔編、プラスチックの海—おびやかされる海の生き物たち—、海洋工学研究所出版部、302pp.(1995)

微小プラスチックの広がり—小笠原諸島父島海岸より—、pp.75-88、佐尾和子・丹後玲子・

根本稔編、プラスチックの海—おびやかされる海の生き物たち—、海洋工学研究所出版部、302pp.(1995)

エトピリカ的生活、pp.87-92、片岡義廣著、エトピリカ、北海道新聞社、94pp.(1998)

オオミズナギドリの受難史、pp.112-117、寺沢孝毅編、北海道 島の野鳥、北海道新聞社、163pp.(2000)

プラスチックによる海洋汚染—われわれの生存を脅かすプラスチック—、pp.125-154、馬渡俊輔、木村純編、21世紀・新しい「いのち」像、北海道大学図書刊行会、276pp.(2000)

主な論文

H.Ogi and T.Tsujita: Preliminary examination of stomach contents of murre(*Uria* spp.) from the eastern Bering Sea and Bristol Bay, June-August, 1970 and 1971. Jap.J.Ecol 23(5), 201-209(1973)

H.Ogi, T.Kubodera and K.Nakamura: The pelagic feeding ecology of the Short-tailed Shearwater *Puffinus tenuirostris* in the subarctic Pacific region. J.Yamashina Inst. Ornithol.12(3), 157-182(1980)

H.Ogi and T.Hamanaka: The feeding ecology of *Uria lomvia* in the northwestern Bering Sea region. J.yamashina Inst.ornith.14(2/3),270-280(1982)

H. Ogi: Seabird mortality incidental to the Japanese salmon gill-net fishery. In J. P. Croxall, P. G. H. Evans, and R. W. Schreiber(eds.), Status and conservation of the world's seabirds, International Council for Bird Preservation, Techn. Publ. No. 2, Page Bros., Norwich, England, pp.717-721(1984)

H.Ogi: Feeding ecology of the Sooty Shearwater in the western subarctic North Pacific Ocean. In

- D. N. Nettleship, G. A. Sanger, and P. F. Springer(eds.), Marine birds: their feeding ecology and commercial fisheries relationship, Can. Wildl. Serv. Spe. Publ. pp.78-84(1984)
- H.Ogi, H.Tanaka and T.Tsujita: The distribution and feeding ecology of murre in the northwestern Bering Sea. J. Yamashina Inst. Ornithol. 17(1),44-56(1985)
- H.Ogi, H.Tanaka and H.Yoshida: The occurrence of Mottled Petrels in the Bering Sea. Mem. Natl Inst. Polar Res. Spec. Issue(44),153-159(1986)
- H.Ogi: Ingestion of plastic particles by Sooty and Short-tailed Shearwaters in the North Pacific. In R. S. Shomura and M. L. Godfrey(Editors), Proceedings of the Second International Conference on Marine Debris, 2-7 April 1989, Honolulu, Hawaii, pp.635-652. Vol.1, U. S. Dep. Commer. NOAA Tech Memo. NMFS, NOAA-NMFS-WSFC-154(1990)
- H.Ogi and K.Shiomi: Diet of murre caught incidentally during winter in northern Japan. Ank 108(1),134-185(1991)
- H.Ogi and T.Miyashita: Sighting a Gyrfalcon in the Sea of Okhotsk. J. Yamashina Inst. Ornithol.23(1),20-21+1 Plate(1991)
- 塩見浩二・小城春雄:エトピリカ (*Lunda cirrhata*) の形態的特徴と雌雄差、山階鳥類研究所研究報告 23(2),85-106(1991)
- 小城春雄・佐藤理夫:北海道渡島大島における秋季の鳥類観察記録、日本鳥類学会誌 39(3),101-102(1991)
- H.Ogi, H.Sasaki, M.Ohtani, K.Watanabe, M.Matsushiro, I.Shouji, and Y.Hayasaka: Three Ardeidae species sighted at sea off southwest Hokkaido, in the Sea of Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol. 24(2),94-95(1992)
- K.Shiomi and H.Ogi: Feeding ecology and body size dependence in diet of the Sooty Shearwater, *Puffinus griseus*, in the North Pacific. Proc. NIPR Symp. Polar Biol(5),105-113(1992)
- H.Ogi, A.Yatsu, H.Hatanaka, and A.Nitta: The mortality of seabirds by driftnet fisheries in the North Pacific. INPFC Bull. 53,499-518(1993)
- H.Ogi, Y.Hattori, T.Yoshino, T.Yamahara, N.Sawada, and T.Furukawa: Sighting of Short-tailed Albatrosses over the Bering Sea. J. Yamashina Inst. Ornithol.25(1),102-104(1993)
- H.Ogi, K.Momose, F.Sato and N.Baba: Plastic particles found in the stomach of a starved Black-footed Albatross (*Diomedea nigripes*). J. Yamashina Inst. Ornithol.26,77-80(1994)
- H.Ogi, F.Sato, A.Mitamura, T.Baba, and H. Oyama: A survey of Black-footed Albatross breeding colonies and chicks on Torishima, January, 1994, J. Yamashina Inst. Ornithol. 26,126-131(1994)
- H.Ogi, H.Akutagawa, M.Yoshida, M.Sato, Y.Hayashi, and M.Tanaka: Two sighting records of the Black-capped Kingfisher (*Halcyon pileata*) on Oshima Oshima Island in Hokkaido, northern Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol. 26,140-143(1994)
- H.Minami, M.Minagawa, and H.Ogi: Changes in stable carbon and nitrogen isotope ratios in Sooty and Short-tailed Shearwaters during their northward migration. Condor, 97:565-574(1995)
- H.Ogi, N.Oka, and N.Maruyama: Historical review of exploitation of streaked shearwaters on Oshima Ohshima Island by seaweed gatherers. Wildlife Conservation Japan 1(2),55-67(1995)
- H.Minami, and H.Ogi: Determination of migratory dynamics of the Sooty Shearwater in the Pacific using stable carbon and nitrogen isotope analysis. Mar. Ecol Prog. Ser.158,249-256(1997)
- H.Ogi, M.W.Newcomer, H.Fujimura and S.Shiratori: Seasonal distribution of the Mottled Petrel in the Northwestern North Pacific. Bull Fac. Fish. Hokkaido Univ.50,45-59(1999)

海鳥研究の自分史

第10回山階芳麿賞受賞者 小城春雄

(北海道大学大学院水産科学研究科教授)

※本稿は「山階鳥研NEWS」2001年4月号「私の鳥学」に掲載したものです。

今回思わぬ賞を戴く事になり身に余る光栄と感じ入っております。これも多くの方々の日頃からの御協力や御理解があったればこそで、私としては周囲の好意に甘えて何とか研究らしい事を続けてこられたと感謝する気持で一杯です。これまでの私の研究を紹介してみたいと思います。

海鳥研究への転換

北海道大学に入学し、ベニザケの生態学的研究を行いたいとの夢を持っておりました。幸いにして、大学院時代はブリストル湾のベニザケ幼魚の淡水域から海洋生活期初期の血清中の金属イオン濃度を調査することになりました。毎年アメリカの調査船に乗船し、巻き網で漁獲したベニザケ幼魚から血液を採集していました。ところが、当時のロバート司法長官が暗殺され、翌年のベニザケ調査は一気に予算が削られる事態となり、研究の続行が不可能になりました。そんな折、北大の練習船おしよる丸で流網操業をブリストル湾で行ったところ、ベニザケ幼魚が漁獲され、おまけに多数のウミガラスも混獲されました。その胃内容物中には何とベニザケ幼魚が見出されました。

いろいろ調べてみると、外洋域における海鳥類の食性研究の全くない事が明らかとなり、海外の研究者から「あなたが問い合わせている分野はラストパイオニアフィールドであり、あなたが研究してはどうか」との返事をもらいました。その人はウッドバルディ博士でした。海鳥の見分け方も判らないまま、流網操業時に混獲された海鳥標本の収集を開始しました。

食性研究

まず取り組んだのはウミガラス類の胃内容物調査でした。初めの頃はウミガラスもハシブトウミガラスも判別できませんでした。とにかく論文に纏めて生態学雑誌に投稿しました。外洋域での情報が無かったせいか、海外の鳥学雑誌に引用されることが多く、我ながら吃驚しました。その後、ウミガラス類のアナディール湾、オホーツク海、北西部北太平洋等における食性を明らかにしました。また、北太平洋域におけるハシボソミズナギドリやハイイロミズナギドリ等の胃内容物も明らかにしました。これらの調査から同属種である海鳥類の内祖先型に近い種は魚食性で、新参種の多くはプランクトン食性である傾向の強いことが明らかとなりました。

目視観察

およそ20年間毎年北洋への長期航海に乗船する結果となりました。これまでにベーリング海などには14回程行く結果となりました。おまけに、日本船での最北到達記録となる、おしよる丸による北極海航海にも乗船する機会に恵まれました。乗船を重ねるに従い、目視観察も始めました。

特にニュージーランド海域から飛来するマダラシロハラミズナギドリのベーリング海や北太平洋における分布に興味を持ち、この海鳥種の夏季における北洋海域の分布移動の実態を2報の論文に纏めました。その他アホウドリ、シロハヤブサ、サギ類等の外洋上の目視観察記録も山階鳥研報(「山階鳥類研究所研究報告」のこと)に載せて頂きました。

論文にはしていませんが、アリューシャン列島のバルディア島周辺海域の調査では、1週間連日、島を周回し目視観察を行ったことも印象深く思い出します。またオホーツク海は2年に亙りほぼ全域を踏破したことも懐かしく思い出します。

昨年夏には北方四島海域の調査に団長として参加し、自然が何ら破壊されないまま残っていることに感嘆しました。沿岸漁業の無い自然が如何に尊いものであるか、実感しました。

イシイルカ混獲問題

1979年よりサケマス流網漁業にイシイルカが混獲されることが日米間で問題になりました。その後5年間イシイルカ調査船に連続乗船することになりました。南極海鳥で有名なエインリー博士と乗船し共に目視観察する機会もありました。日米の研究者が共に調査をする過程で、海鳥混獲も無視できないことが明らかになり始めました。

水産庁が借り上げた調査船で出港したものの、船員が給料が安いということでストライキを起こし、仕方なく調査員2人と船頭1人でイルカを突きん棒で突く羽目になりました。私もイシイルカをはじめ、マイルカ、セミイルカ等15頭程突きました。船は小さく150トン程度でありながら一航海無寄港で1~2ヶ月間洋上で過ごしました。コック長は俄仕立てで、料理の上手い漁師が代行するものですから、計画性など無いので半月ほど経つと野菜や肉などはなくなり、残っているのは米、味噌、たまねぎだけとなります。そうなるとおかずは毎日イルカです。食べ慣れるとおいしいものですが連日となると飽きます。刺身、照り焼き、煮物、焼肉、味噌汁とイルカづくしです。おかげで4~5種のイルカを賞味しました。また、イシイルカの論文が2編書けました。

漁業による海鳥混獲

漁船に乗船して海鳥調査に出向くことが多かったのと、当時日本に外洋域での海鳥研究者がいなかったことから、国際問題化した海鳥混獲の問題に巻きこまれ、水産庁から依頼を受け、サケマス流網漁業、アカイカ流網漁業、およびミナミマグロ延縄漁業等について調査を行ないました。

当時国益を守る立場から調査結果を発表できない仕事となりました。しかし、国際世論が厳しくなるにつれ、混獲情報の全ては北太平洋漁業国際委員会の場で全て報告書として纏めました。また、混獲問題は当時の国際鳥類保護会議のシンポジウムでも紹介され、報告として提出することを求められました。

一番思い出深いのは、母船式サケマス流網漁業のアメリカ200海里内の操業について、アメリカ国内で開催された公聴会にも呼び出され証言したことです。公聴会はシンポジウムのようなものと気楽な気持ちで出席したところ実は裁判で、被告席に座らされるは、嘘をつかないと聖書に手を置いて宣誓はさせられるはで、これには吃驚しました。幸いなことに、当時アメリカ側に日本漁業による海鳥混獲について知識を持っている研究者がいなかったため、アメリカ側の弁護士による厳しい追求が出来ず、私は証言だけすれば良いことになり助かりました。

プラスチック汚染

海鳥の食性研究を始めた1970年代初め頃から、砂囊中に妙な物質が含まれているのに気付きました。それらがレジンペレット(プラスチック原材料)であるとは判りませんでした。保存しておけばその内判るだろうと試料を保存しておきました。丁度、サイエンス誌にサルガッソ海におけるレジンペレットの分布に関する論文が掲載され、海鳥類の砂囊から見出されるものと極めて良く類似していたことから、これがプラスチック汚染物質であることに気付きました。

その後アラスカ大学のデイ博士が修士論文で北洋海域の海鳥類によるプラスチック粒子取りこみについての纏めました。さらには、マルポール条約という船上で出たゴミを燃やしてから海に投棄すべきであるとの国際法が、ウミのゴミについて討議する国際シンポジウム(Marine Debris Conference)で決定されるという珍しい事態が起きました。

これに我が国の水産庁は何ら関与していなかったため、一方的に漁業廃棄物に関して非難を浴びることになりました。漁業大国としての面子がつぶされると感じた水産庁は、大型調査費を投入し、特にGhost Fishing対策や海洋汚染物質調査を開始しました。

私は、海洋表層を漂流するプラスチック微小粒子や、海鳥類がパイカ現象により取り込んだプラスチック粒子の調査を担当しました。これらの調査結果は4論文として纏めましたが、その内の一つにはクロアシアホウドリの胃中から見出したプラスチックについて山階鳥研報に短報として纏めました。現在もプラスチック汚染については、北海道周辺海域や鳥島周辺海域での調査を続行しています。また海洋の微小プラスチック汚染の問題も、今後の海洋環境保全のためには是非とも取り組んでいかなければならない重大問題であるので、それらのソーティング方法についても水産学部の彙報に発表しました。

離島調査

1988年に日本最大の無人島である渡島大島へオオミズナギドリの調査に出向きました。この調査でこの島に魅せられました。そしてこの島への調査に合計13回も通いました。これが離島調査に興味を持った始まりでした。

無人島の生態系は外来動物や植物に極めて脆弱であり、それらの影響が直接的に発現します。そして山階鳥研が行っている鳥島調査に2回も同行させてもらいました。その他日出島、八丈

島、天売島、沖縄の宮古島へと仕事を作っては出かけました。渡島大島のオオミズナギドリの漁師による捕獲の歴史を英文で発表しましたが、日本では誰も読んでくれないようです。

ウミネコの繁殖生態

ここ3年間連年調査を行っているのは、利尻島でのウミネコの繁殖生態です。我が国の代表的な海鳥でありながら本格的な生活史研究の無いのには驚きます。講座の4年生や大学院生の研究指導で毎年2ヶ月間は滞在しています。女子学生の多いのが特徴です。知らない人はまるでハレムのように羨ましいなどと怪しからぬことを言いますが、実際の女の子達は結構怖いです。それに結構乱暴です。大酒は飲むし、菓子は際限無く食うし、良くしゃべるし、パソコンはバリバリ叩くし、彼氏からの携帯電話はうるさいし、もっと旨いものを食べせると脅迫するし、コンブ、ウニ、アワビは取ってこいと密猟を強制するし、料理では何を食べさせられるか判らないし、正直言ってかみさんの2倍は怖いんです。しかし、よく勉強し、調査をする馬力は凄いです。学生と楽しく過ごすことが意外と私の健康法となっているのかもしれない。

注目すべき成果としては、ウミネコは意外に毎日の生活史の中で淡水を飲むことが塩腺の研究から判ったことです。それと、本格的な抱卵は2卵目産卵直後から開始されることが卵交換実験から判りました。食性調査からは、産卵、抱卵、育雛期と進むに従い魚食性が強まること、人間の出す生ゴミには殆ど依存していないことが明らかとなりました。また、環境ホルモン濃度も測定しましたが、極めて汚染されていないことも判りました。外洋性海鳥類のPCB濃度が意外と高いのとは対照的でした。これは不思議なことでした。

海鳥保護問題

最近気になるのは、我が国の海鳥繁殖地の多くが消えつつあることです。特にウミスズメ科海鳥類では目立ちます。ウミガラス、エトピリカ、ウミスズメ等は繁殖数が絶望的なほど減少しています。ケイマフリも減少傾向にあり心配しています。また、マダラウミスズメは恐らく繁殖しているものの証拠が見出されていません。コバンウミスズメは1970年代の夏季には釧路港内で索餌しているのを度々観察しましたが。現在は全くいなくなりました。

水産庁の事業として日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料と水産版レッドデータ・ブックの作成委員会では水鳥部会長として纏めました。どうも海鳥に関しては水産庁の方が環境庁より適しているように感じました。ただし漁業が絡むと、海鳥は隅に押しやられてしまい、全てに人間の経済活動が優先されてしまう現実だけは納得できません。

一番残念に思うのは鳥島のアホウドリの問題にしても、島全体の生態系を考慮しないでアホウドリの保護だけに対策が集中していることです。この問題は次代の若い人たちの解決すべき問題となると思います。

教育

私の大学における最大の目的の一つは、海に関して幅広い知識を持っている若い人で、かつ海鳥研究のできる人材を育てることです。まず考えたことは、船乗りの資格を持ち海鳥研究のできる者、生物、化学、物理的側面から海鳥を研究できる者等を育成し卒業論文、修士論文、博士論文完成まで導くことです。幸いにして私の属す講座では、私が大学院生の頃から11名もの国家公務員上級試験にパスしているほど優秀な人材に恵まれてきました。ある国立の水産研究所では石を投げると私の属す講座の出身者に当ると冗談を言われる程でした。この伝統だけはこれからも維持してゆきたいと願っています。

今春は、航海士を育成する特設専攻科終了後、大学院課程を終え学位を取得する伊藤真君が育ちました。

私にとっては今回の受賞は一つの教育成果を評価して頂いた嬉しさにも通じています。近未来における海洋の人類に対しての役割は計り知れないものがあると思います。それは単に食糧資源だけではなく、地球上に住む人類の生存に懸かる環境問題も含まれています。海の調査活動は今後益々、国際的に重要になると考えます。そんな時に、わが大学では練習船が一隻減船になりました。船舶航海士の課程が廃止となったのです。全くこのことは我慢がなりません。今からでも何とかならないものかと思っています。

山階芳麿賞とは



山階芳麿賞は、平成4年財団創立50周年に、山階鳥類研究所の創設者である故山階芳麿博士(1900-1989)の功績を讃え、我が国の鳥学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

鳥学の分野で国際的に有名な賞にはデラクール賞がありますが、現在わが国には、鳥学研究者を対象とした賞は山階芳麿賞以外にはないため、山階芳麿賞は日本版デラクール賞といえる位置づけです。

受賞者は「山階芳麿賞」選考委員会で選考されます。選考委員会は、山階鳥類研究所所長が委員長を務め、日本鳥学会会長、山階鳥類研究所研究部長、山階鳥類研究所理事および評議員(7名以内)、学識経験者(5名以内)で構成されています。受賞者は、毎年度1名あるいは1団体とし、該当者がいない場合は、その年度の表彰は行いません。

受賞者には、表彰状と山階芳麿賞記念メダルが授与されます。記念メダルのデザインは、表が山階芳麿博士肖像、裏がヤンバルクイナのレリーフとなっていて、受賞年と受賞者氏名が刻印されます。ヤンバルクイナは沖縄県で発見され、1981年に山階芳麿博士らが新種として発表した鳥で、現在では山階鳥類研究所のシンボ

ルの一つになっています。

これまで、次の方々が受賞されました。

- 第1回 羽田健三¹⁾(信州大学名誉教授) 独創的な雁鴨科鳥類の群集生態学研究、鳥類生態学を志す後進の育成
- 第2回 松山資郎²⁾(山階鳥類研究所顧問) 応用鳥学・野生鳥類の保護管理に関する基礎的研究、野生鳥類保護管理に関する後進の指導
- 第3回 中村 司(山梨大学名誉教授) 鳥類の渡りに関する生理学的研究、地元における鳥類保護・自然保護の推進
- 第4回 黒田長久(山階鳥類研究所所長) 鳥類の形態・生態に関する幅広い分野の研究、現代鳥学界における礎石的存在
- 第5回 中村登流(上越教育大学名誉教授) 鳥類社会学に関する長年の研究、鳥類社会学を志す後進の指導
- 第6回 正富宏之(専修大北海道短大教授) 我が国の動物行動学の発展に貢献、長年タンチョウの生態研究と保護に尽力
- 第7回 樋口広芳(東京大学大学院教授) 人工衛星を使ったツル類やハクチョウ類の渡りの追跡調査をはじめとする独創的な鳥学研究と保全生物学の推進
- 第8回 山岸 哲(京都大学大学院教授) 鳥類の社会生態学的研究の推進とオオハシモズ科の適応放散の研究と保護に貢献
- 第9回 藤巻裕蔵(帯広畜産大学教授) エゾライチョウの野外研究を基にその飼育や保護管理に貢献、日本とロシアの鳥類研究者との交流を推進

1) 平成6年11月逝去

2) 元農林省主任研究官、元山階鳥類研究所事務局長・資料室長。平成12年8月逝去

山階芳麿博士の業績



山階芳麿博士は、明治33年(1900)7月5日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍幼年学校、士官学校を経て砲兵将校となりましたが、動物学研究の望みを断ち難く、帝国大学(現東京大学)理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎的な学問を学びました。

動物学選科を昭和6年に修了、昭和7年には山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、その後鳥類の研究に没頭し、積極的にアジア・太平洋地域の鳥類標本収集に努めました。昭和14年から、北海道帝国大学(現北海道大学)のおくま まさる小熊捍教授の指導を受け、鳥類の雑種の不妊性の研究を行いました。昭和17年「鳥類雑種の不妊性に関する論文」で同大学から理学博士号を受けました。

その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いて分類する方法を鳥類の分類に導入して、国の内外から高く評価されました。昭和24年には「細胞学に基づく動物の分類法」を著し、翌25年、日本遺伝学賞を受賞しました。

また、当時戦後のタンパク質不足から、文部省から「ニワトリの増殖」について研究委託を受け、多産で肉質がよいニワトリの品種改良にも取り組みました。その他、バリケンとアヒルの雑種ドバンの増殖研究にも力を入れました。

戦後は、鳥類研究だけでなく、保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。

博士の主な著書としては昭和8~9年「日本の鳥類と其の生態 第1巻」、昭和16年に「日本の鳥類と其の生態 第2巻」を、昭和61年には世界の全鳥類に和名を付けた「世界鳥類和名辞典」を出版しました。

昭和52年には、鳥学の世界のノーベル賞とも言われる、ジャン・デラクール賞を受賞。翌53年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第1級ゴールデンアーク勲章を受賞しました。

平成元年(1989)1月28日、88才で亡くなりました。

1) ジャン・デラクール賞

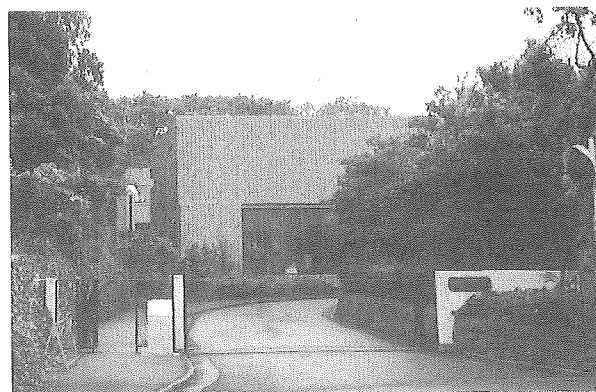
鳥学者のノーベル賞と呼ばれ、鳥学の世界では最高の勲章です。この賞は1967年(昭和42年)国際鳥類保護会議(ICBP)が設けたもので、Ornithology(鳥学)、Conservation(保護)、Aviculture(保護のための増殖)の三つの分野において、すべてに世界的な貢献をした人に授与されます。この賞はキジ類や水鳥の研究で世界的に知られ、国際鳥類保護会議の第2代目の会長を20年も務め、その他いくつかの国際団体の会長も務めたフランス人、ジャン・デラクール博士(1890-1985)の業績を讃えて、このように名付けられました。基金は、デラクール博士が自ら拠出し、それを国際鳥類保護会議の米国支部が管理し、同支部に設けられている選考委員会において、満場一致で推薦されることが条件となっています。

第1回の受賞者は1968年にノーベル賞受賞者でもあるオーストリアのコンラート・ローレンツ博士、第2回の受賞者は1970年にイギリスのフィリス・バークレイスミス女史、第3回の受賞者はベルギーのレオン・リベンス伯爵、そして、第4回の受賞者として、1977年日本の山階芳麿博士が選ばれました。以後、受賞者は今日まで出ていないことから、この賞の選考条件が厳しいことがうかがえます。

山階鳥類研究所の概要



昭和7年設立時の標本館



現在の山階鳥類研究所

山階鳥類研究所は、故山階芳麿博士が昭和7年(1932)に私費を投じて渋谷区南平台にある山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。昭和17年(1942)には文部省から財団法人の許可を受け、標本や文献を公開し、鳥類研究を目指す学者やアマチュアに研究の場を提供し、鳥類全般に関する科学的研究をおこなう我が国唯一の鳥類専門研究所となりました。来年、平成14年には、標本館発足から70年、財団発足から60年を迎えます。

戦後、空襲で山階邸が全焼したにもかかわらず焼け残った研究所は、学問に理解があったアメリカ軍将校の配慮で接収を免れ、小さな建物に動物分類学会、生物地理学会、日本野鳥の会などの学会関係機関が身を寄せて再出発しました。

研究所は戦前、戦後を通じて多くの鳥類研究者を育て数々の業績を上げましたが、建物の老朽化、面積の不足、職員の増加、財政の逼迫などの難問が山積し、昭和59年(1984)11月、南平台の敷地を売却し、千葉県我孫子市高野山に新しい研究所を建設して移転しました。

研究所は事務局・研究部(3研究室)・標識研究室・資料室および広報室から構成されています。所蔵標本6万9千点、蔵書3万7千冊を擁し、鳥類学の拠点として基礎的な調査・研究をおこなうとともに、環境省の委託を受けて鳥類

標識調査をおこなっています。また、研究論文を掲載する「山階鳥類研究所研究報告」を年2回刊行し、「山階鳥研ニュース」を毎月発行して鳥類学の普及啓蒙活動をおこなっています。現在、職員数は30名、総裁は秋篠宮文仁親王殿下です。

各部署の紹介

研究部

1) 第一研究室

生化学・遺伝学の手法を用いて鳥類の系統・類縁関係を研究しています。鳥類の血液や組織の酵素タンパク質を電気泳動してタンパク質の組成の違いを検出し、このデータを集団遺伝学的に処理し、系統・類縁関係を明らかにしています。また、血液や組織から抽出した微量なDNAから、その塩基配列を明らかにし、鳥類の系統・類縁関係を調べる実験も行っています。

2) 第二研究室

都市化された環境の中で生活している鳥類の生態、その管理や防除に関する研究を行なっています。特にドバトの個体数管理やカラスの送電鉄塔営巣対策では、成果をあげて来ました。また、鳥獣に関する歴史的な役割についての分析も行なっています。

3) 第三研究室

鳥類の生態を保全生物学的に研究しています。

歴史的に人間の影響が強く働いてきた浅水域や沿岸、沖合域で、水鳥・海鳥が受ける影響、生態系で果たす役割の解明を行っています。世界で多発する油汚染が鳥類へ及ぼす影響について、個体と群集レベルで実態を明らかにしました。栄養生態学的研究手法で鳥の体の分析の実験もを行っています。

標識研究室

環境省の委託による全国的な「鳥類標識調査」で、毎年約20万羽の渡り鳥に足環を付け放鳥し、渡りの経路や生息数のモニタリングの調査を行っています。また日本の鳥類標識調査のセンターとして、調査者の養成やデータのとりまとめと分析、諸外国と標識情報の交換などを実施しています。

近年では人工衛星を用いたハクチョウ・ガン・ツル類等の渡りの追跡や鳥島におけるアホウドリの保護研究なども行っています。さらにアジア地域における渡り鳥標識調査の充実のため、研修会の開催など外国との交流も盛んです。

資料室

1) 図書室

図書室は鳥類学に関する国内外の単行本や専門学術雑誌など、広範囲にわたる文献を所蔵しています。その数およそ3万7千冊にのぼり、国内では鳥類学に関する蔵書数として他に類を見ません。ここでしか見ることのできない国外の学術書や、19世紀ビクトリア王朝時代に発行された石版手彩色図譜など、現在では入手困難な貴重な資料も含まれています。

図書室では日本の鳥類学の発展のため、関係図書の収集を意欲的に行うとともに、研究者等の利用にも応じています。

2) 標本室

山階鳥類研究所には、剥製標本・骨格・巣・卵・液浸標本などの、鳥類の標本約6万9千点を所蔵しています。

コレクションは、創立者である山階芳麿ほか日本の代表的な鳥類学者の収集品、および交換・購入等によって集められた内外の標本からなっています。現在では、世界中の代表的な種類が網羅され、特に東アジア・太平洋地域の充実したコレクションは、世界でも指折りのものです。学術的に貴重な標本も多く、種の記載の基準となった模式標本（ヤンバルクイナほか）や、すでに絶滅した鳥の標本（リョコウバトなど）も含まれています。

標本は研究者の利用にも供されており、国内外の研究機関からの問い合わせ等にも応じています。

広報室

広報室では皆様と山階鳥類研究所をつなぐ窓口としての役割のほか、研究活動などを紹介する「山階鳥研ニュース」を毎月発行しています。また、探鳥会や講演会などを開催しています。その他にも毎月1回の所内見学会(第4金曜日)や、皆様からのご質問(原則として毎週金曜日)も担当しています。

なお、見学会は事前に予約が必要です。

賛助会員のご案内

山階鳥類研究所では、研究や活動を支えてくださる賛助会員を広く募集しています。賛助会員の方には山階鳥研の活動をお知らせする「山階鳥研ニュース」や学術誌「山階鳥類研究所研究報告」をお届けいたします。

山階鳥研は、国内では唯一の鳥類学に関する民間学術研究機関であり、その蔵書数・標本収蔵数は東洋一とも言われています。山階鳥研の研究や活動は日本における鳥類学や鳥類保護の礎であり、指針となっています。しかし、民間研究機関の例にもれず資金難により思うような研究活動ができない現状です。賛助会員の方々の賛助会費は山階鳥研の研究・活動を支えるだけでなく貴重な図書や標本の維持管理にも使われます。また大きな目でみれば日本の鳥類学・鳥類保護に貢献することになります。皆さまの暖かいご理解をお願い申し上げます。

賛助会員には法人（1口5万円）、個人（1口1万円）があり、法人賛助会員には「山階鳥研ニュース」と学術誌「山階鳥類研究所研究報告」をお送りします。

個人賛助会員の方は「山階鳥研ニュース」もしくは学術誌のいずれか

を選択することができます。また鳥研ニュースと学術誌の両方を希望することもできます。その場合は1.5口（1万5千円）となります。

入会ご希望の方はお手数ですが次ページの申込用紙に必要事項をご記入、捺印のうえ、以下の宛先までお送りください。折り返し送料無料の郵便振り込み用紙をお送りします。

また、資料の請求も以下へお願いいたします。

【入会申し込み・資料請求の宛先】

〒270-1145

千葉県我孫子市高野山115
財団法人 山階鳥類研究所
事務局（担当：箕川^{みのかわ}）

TEL 0471 - 82 - 1101

FAX 0471 - 82 - 1106

E-mail: jimmu@yamashina.or.jp

【郵便振替口座】

口座番号 00140-0-411064

名義 (財)山階鳥類研究所

(切り取り線)

賛助会員申込書

年 月 日

(法人・個人) 賛助会員として () 口) 申し込みます。

ご希望のコースに○をおつけください。

1. 山階鳥研ニュース (1口 1万円)
2. 山階鳥類研究所研究報告 (1口 1万円)
3. 山階鳥研ニュースと山階鳥類研究所研究報告 (1.5口 1万5千円)

〒

住所

電話番号

名前 (フリガナ)

印

ご紹介者

※申込書は切り取って、ハガキに張り付けてもご利用できます。

(切り取り線)

賛助会員申込書

年 月 日

(法人・個人) 賛助会員として () 口) 申し込みます。

ご希望のコースに○をおつけください。

1. 山階鳥研ニュース (1口 1万円)
2. 山階鳥類研究所研究報告 (1口 1万円)
3. 山階鳥研ニュースと山階鳥類研究所研究報告 (1.5口 1万5千円)

〒

住所

電話番号

名前 (フリガナ)

印

ご紹介者

※申込書は切り取って、ハガキに張り付けてもご利用できます。

【表紙の写真】

クロアシアホウドリの親子（伊豆諸島・鳥島で 提供・小城春雄博士）

海鳥、環境そして人間 — 海鳥からみる地球環境の将来 —
平成 13 年度 山階芳麿賞授賞式と受賞記念講演会

発 行 財団法人 山階鳥類研究所 広報室
〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115
TEL.0471-82-1101 FAX.82-1106
E-mail:koho@yamashina.or.jp

発行日 2001 年 6 月 1 日
